

シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン ヴィジュアル/科学コミュニケーションの領域から

日時 2010年3月12日(金) 16:00～18:00 場所 芝蘭会館 山内ホール
共催 キャリアサポートセンター、女性研究者養成システム改革推進委員会

女性研究者支援センターでは、「私の仕事とキャリアデザイン」というシリーズでシンポジウムや研究会を実施していくこととしました。その第1回目は、土佐 尚子先生と八木絵香先生にご講演をお願いしました。司会 は村山 留美子先生(工学研究科助教・広報WG推進員)です。はじめに女性研究者支援センター長の稲葉 カヨ先生より挨拶がありました。稲葉先生は、このシリーズでは、いろいろな分野の先生方をお招きし、研究について、あるいは歩んでこられた道などのお話をさせていただくことによって、参加者の皆様が将来の道を考える一つの助けになってほしいと話されました。



まずは、土佐 尚子先生(京都大学学術情報メディアセンター教授)より、「カルチュラル・コンピューティング」—文化・無意識・ソフトウェアの創造力—のテーマでご講演をいただきました。土佐先生はご自身をメディアアーティスト兼研究者であると定義されています。小学校の頃から美術が得意で、アーティストになりたいという希望をお持ちでしたが、具体的

にどの資格を取ったらいいか、どのような道順を進めばよいか全くわからなかったそうです。手さぐり状態の中、社会人の演劇集団で活動したり、現代美術で絵を描いたり、彫刻やオブジェ制作など一通りやってみたそうです。とりわけ、実験映像の面白さに惹かれ、グラフィックスのデザイナーとして働きながら、ビデオアートの制作に取り組みました。作品をビデオアート展や美術館に出し、高く評価されるという喜びの一方で、仕事も忙しくなり、体を壊してしまうという結果になって、企業を退職されました。退職後は、大学院で学ばれ、博士号を取得後、武蔵野美術大学講師、ATR 知能通信研究所研究員、JST 相互作用と賢さ領域研究員、マサチューセッツ工科大学建築学部 Center for Advanced Visual Studies フェローアーティストなどを経て、京都大学に着任されました。感情、意識、無意識の情報を扱ったコミュニケーションをテーマに、そのアートとテクノロジーの領域を研究主題とされています。コンピュータテクノロジーの技術進歩は著しいのですが、それらをうまく取り入れ、その時々で新しい制作技術、コンピュータ機材を駆使し、研究、制作を続けてこられました。講演の中では、実際にその作品をご紹介します。

土佐先生の研究の基盤は、まず、コンピューターを人

間と見たてたことにあります。人間と見たてた場合、コミュニケーションをする、対話をするということをやってみようと思ったそうです。人間の声の抑揚に応じて、グラフィックの顔の表情を変えるようなニューラルネットワークの研究や、コンピュータの音声認識機能を使って、人間の言葉をしゃべらせたりしたそうです。人間とコンピュータとのインタラクティブ漫才の開発も手掛けられました。

そして、アメリカでの研究活動をきっかけにして、日本文化の精神をコンピュータで可視化することに取り組み、「カルチュラル・コンピューティング」という領域を開拓されました。文化をコンピューティングするということはどういうことなのでしょう。コンピューターは「わび、さび」のようなもの、目に見えないものだけでなく、美意識としてそこにあるものを表現できるのでしょうか。土佐先生は、こういうことを研究してこられ、現在は、京都大学オープンコースウェア編集長も務めておられます。

続いて、八木 絵香先生(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師)より、科学技術コミュニケーションという道—研究者として、実践者として、1人の子供の母として—のテーマで、お話いただきました。



科学技術コミュニケーションの分野は、第3期科学技術基本計画(2006-2010年)の中で、科学技術の振興とは、それが社会、国民に支持され、成果が社会に還元されなければならないという方針が強く打ち出されたことで、大きく前進しました。八木先生は、この計画が実施される前から科学技術コミュニケーションに取り組みられてきましたが、今後も科学技術とコミュニケーションは切り離せない関係にあると考えておられます。アプローチは大きく3つあり、(1)サイエンスカフェなどで研究の成果を一般公開する、(2)出前講義などで科学的なリテラシー向上の取り組みをする、(3)科学技術を社会の中でどう使うかという政策決定につなげる「科学技術に対する市民参加」の取り組みです。八木先生は、この中で(3)のアプローチを行う立場におられます。

学部生時代は、御巣鷹山で起きたJALの事故や原子力発電所もんじゅの事故などのような、巨大技術によって発生する事故を再び起こさないために、どのような対策が必要なのかという観点からの研究で、ヒューマンファ

シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン

クター研究、もしくは人間工学的な研究を心理学的なアプローチで実行されました。

学部卒業の年に阪神淡路大震災が発生し、現地調査をする中で、事故も災害もコミュニケーションをとるべき人同士（例：被災者と行政職員）が直接つながらないこと、つながらないだけでなく、相互に不信感を持っている（例：行政は何もしてくれない、被災者は自己中心的）ことを痛感されました。社会人となってから、茨城県東海村のJCO臨界事故後に現地調査に入り、住民と技術者との認識の違い、相互の不信感を実感し、このような認識のずれをを埋めるためのコミュニケーションの在り方を研究しようと、東北大学に社会人大学生として入学され学位を取得されました。

八木先生の研究的なアプローチ方法は、実際に現場に入って、この人とこの人がコミュニケーションを取るべきだと思った人同士をどんどん結び付け、そこに対話の場をつくって、対話の場でそれぞれがどう変化したか、そこから何かを探せるかということをやっていくスタイルです。原子力施設が立地されている地域の住民と専門家との対話の場を作って、研究を進めておられ、青森県の六ヶ所村と、宮城県の女川を研究のフィールドとされています。この2か所で合計42回の議論の場を持った結果、市民、専門家双方に変化が見られたそうです。お互いの意見や立場を理解しようという動きが見られ、価値観の違いを認められるようになったそうです。

八木先生は、ファシリテーターとして、仲介的な第三者的な立場でコミュニケーションの場に入ることが多いそうですが、これから、医学・理工系の研究者になる人たちには、いろいろな立ち位置で、一般の人々とのコミュニケーションを強く求められる場面に出あうでしょうから、科学コミュニケーションの必要性に直面した場合のことも考えて、研究を続けてもらいたいと考えておられます。

最後に、一児の母として研究を続けている現状をお話くださいました。育児と研究の両立が可能かということをよく聞かれるそうです。でもそれは、自分の中で何を両立とするかを決めるという問題だとおっしゃいます。



実際、子どもがいない時と同じペースで仕事をするのは、物理的に無理なので、何かを切り捨てる、もしくは我慢するという選択は当たり前で、必要なことなのです。育児支援については、今後もっと整備されていくでしょうから、若い方には、研究者になることを不安に思わないでほしいとのメッセージをいただきました。

講演を受けてのディスカッションでは、キャリアデザインについて、お二人の講師のご意見をうかがいました。土佐先生は、自分が死ぬときに後悔しない生き方をするのが一番大事だから、苦勞してもやりたいことを選んだ方が絶対に道は開けると話されました。八木先生は、原子力の問題を扱っている中で、罵詈雑言を浴びる場面もあるそうです。でも、そこでいろいろな出会いがあり、自分の中に蓄積されてきて、もう後戻りはできないと決めているそうです。人生の最後にどうなっているかわからないけれども、それはキャリアにもつながることなのだろうと思っているそうです。

終わりの挨拶では、女性研究者支援推進室長の伊藤公雄先生より、女性研究者支援のように「女性」と接頭語がつくことで、男性の参加が敬遠されることが残念であること、男女ともにこのようなシンポジウムに参加してもらえよう環境をつくっていききたいとのお話がありました。

(女性研究者支援センター 支援室)

京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」表彰式と研究発表



第2回京都大学優秀女性研究者賞（たちばな賞）の受賞者は、学生部門が、渡邊 皓子さん（理学研究科博士後期課程）、研究者部門が、アスリ チョルパン先生（経営管理研究部・寄附講座准教授）に決まり、表彰式と受賞者による研究発表を、3月3日（水）に京大会館101号室にて行いました。

大西 珠枝理事のご挨拶に続いて、吉川 潔理事より審査経緯の説明と表彰状の授与があり、受賞者による研究発表を行いました。そして、稲葉 カヨ 女性研究者支援センター長よりの、受賞者へのお祝いと出席者へのお礼の言葉によって閉会しました。

連載：研究者になる！－第24回－

研究者であること：その便益と費用
経営管理研究部・寄附講座准教授 アスリ チョルパン

女性研究者支援センターから、ニュースレターである『たちばな』に掲載する若い研究者のための指針の執筆を求められたことは、私にとっても非常に喜ばしいことでしたので、この寄稿を快諾しました。本題に入る前に、同センターと京都大学に対して、2010年3月に、京都大学の優秀女性研究者に与えられる「たちばな賞」を授与して下さったことについて、厚くお礼を述べておきたいと思います。京都大学が外国人である私の研究を評価して下さったことは、この大学がジェンダーを超える平等だけではなく、国境を越える平等を重んじる明確な信念を体現していると思います。

これまでこのニュースレターに寄稿された何人かの研究者の方々と比べても、私の研究者への途は容易なものではありませんでした。まず、企業経営の研究をするに至るまでに紆余曲折がありました。私は、母国であるトルコで研究者への途を歩み始めましたが、大学院の修士課程のためにイギリスへ渡り、さらに博士号を取得して自立した研究者になるために日本に来ました。

この研究者へのプロセスで一貫して私はエンジニアとしての教育を受けてきました。しかし、いつからか自分自身がビジネスとか経済とかに、もっと関心があることに気付きました。結果的に、私はそれまでの自然科学の研究を全て投げ打って、社会学者になることを決意しました。このような順調で平坦な途ではないにも関わらず、私はアカデミックな研究者になるという夢を追い求めてきました。何か未知のものを探求し、革新的な何かを作り出すということが、いつも私を励起してきたからです。

プロフェッショナルとしてまだキャリアの浅い私がおこがましくも若い研究者に成功の秘訣を授けるということには躊躇します。ただ、一つの鍵があるとすれば、それは「勤勉さ」ということになるのでしょうか。言うまでもなく、この鍵には精神的な集中が要求されます。大志をかかげ、情熱を持って、粘り強く目標を追求するという精神的な活動が不可欠です。このような投資への見返りとして、通常は良い条件の職、研究費の増額といった目に見える形での便益が上げられるかもしれませんが、しかし、アカデミックな分野あるいは社会一般への貢献から来る満足感、また同じ分野の研究者や家族、友人たちからの賛辞といった目には見えない形での恩恵の方がはるかに重要なことは言うまでもありません。ただし、これらのプラスには、必ずコストが付きまといまいます。精神的なエネルギーを使い尽くすほどの努力のレベルだけではなく、日本では当たり前だと思われてしまっている驚くほど長い研究時間のことです。これは、自分自身、あるいは家族、友人と共有できる時間が短くなってしまふことを意味しています。



アカデミックな生活で長期にわたって成功する鍵は、どのように必要とされる勤勉さから得られる便益を最大にし、その過程で生じるコストをどう最小にするかというバランスを見つけることだと思います。(私自身はまだこのバランスが見つけられていないことを認めておきます。) このバランスに留意しておかないと、いくらアカデミックな点だけで成功しても、プロフェッショナルとして、あるいはプライベートな生活において失敗してしまうという帰結になります。これから研究者を目指す女性がこのようなバランスを見つけるためのポイントを私なりに8つのステップにまとめておきます。



1. 自分が本当に好きなことを研究し、研究していることを本当に好きになること。

今さら何を当たり前のことと思われるかもしれませんが、このポイントで言おうとしていることは本当だと思います。もし自分が研究していることが好きになれないなら、平均的なレベルの研究者にしかなれないでしょう。それ以上の研究者になりたいのなら、研究のテーマを本当に好きになることが必要です。一日の半分以上の時間を研究にささげることが当たり前の生活なのですから。

2. どんなことがあろうと、研究を諦めないこと。

私が最初に学術誌に投稿した論文は、厳しいコメントと掲載不可という判定がついて戻ってきました。このことによって、私は奮い立たされ、なんとか成功をかちとうという意欲が湧いて来ました。目標を達成することは、とにかく頑張ってみることと失敗に学ぶことから可能になるので、諦めることによっては何も得ることはできません。

3. 自分自身が抱いた夢を追い求めること。

私が幼少だった頃、両親はよく「みんながみんな海に身を投げるからといって、あなたはそんなまねはしないよね」と言い聞かせてくれました。いつの間にか、これは私自身の行ないの指針となりました。このような自分が責任をもてる行動をとっていくというのは、時には他の人たちにとって奇異に見えるかもしれません。しかし、他の人たちと同じ行動を取ることは、せいぜいその人たちと同じレベルまでしか達成できません。もっと高いレベルに自分を上げたいのであれば、やはり自分自身で他の人たちとは違った途を探り、異なる生き方をしないとイケないと思います。

4. 自分自身の分野でベストの人たちと研究し、競争すること。その人たちが必ずしも近くにいるとは限らない。

確かに、自分が選んだ分野で模範となるような研究者が近くに存在して、その研究者と協働することが出来るのであれば、それはいうまでもない機会でしょう。しかし、自分自身が現在置かれている物的あるいは研究上の環

境にそのような研究者が存在しないなら、ぬるま湯的な状況を抜け出して、遠く離れたベストの人たちに目を向けるのも良いと思います。

5. 大きなことを考えること。

いつも不可能と思われることを考えることが私は好きです。最後はおぼれることがあったとしても、深い大洋で泳いでみることは、浅瀬で泳ぐまねをしているだけよりはるかに意味のあることです。

6. どの時点でストップするのかを心得ていること。

研究をするということは、竜巻に巻き込まれることに似ています。いったん研究に没頭してしまうと、自分自身が逆にそれに振り回されて、その外に抜け出すことが出来なくなってしまいます。自分の物理的、心理的な限界を予め知って、いつ、どこでストップするのかを心得ておくことが大事です。研究の努力とその成果は、上下が逆になったUの字の形をしているような気がします。ある点を越えると、いくら努力しても必ずしも期待するようなプラスの効果が得られないからです。

7. サポートの体制を整えておくこと。

自分をサポートしてくれる家族や自分を理解してくれている友人たちがいることは決定的に大事なことです。自分が必要と感じたときには、いつも家族と友人たちは傍にいてサポートすることを厭いません。研究以外



のことで穏やかで幸せであることは、研究を含めた生活全般がうまくいくことにとってとても大事だと思います。私の場合は明らかにそうでした。

8. 楽しむこと、もっともっと楽しむこと。自分は競走馬ではありません。

何か楽しいこと、スマイルを取り戻せる何かを見つけおきましょう。前にも書いたように、プロフェッショナルとしての生活とプライベートな生活をバランスさせることは、研究をより充実させるだけでなく、健康で幸せな生活全般を築く上での鍵です。

女性研究者支援センター着任のご挨拶

犬塚 典子



女性研究者支援センターの設立後、3年半にわたってご活躍された登谷美穂子先生の後任として、平成22年4月、着任いたしました。これまで、東北大学で3年半、九州大学で2年半、男女共同参画と女性研究者支援の仕事に従事してきました。九州大学では文部科学省科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業を担当し、折にふれて、稲葉カヨ先生をはじめ、京都大学の先生方から貴重な助言や激励のメッセージをいただいております。このたび、5年の任期をいただき、本センターに勤務することになり、光栄に感じると共に、任務の重さに身が引き締まる思いです。

女性研究者支援センターは、平成21年3月に策定された京都大学男女共同参画推進アクション・プランに基づき、交流啓発広報、相談・助言、育児介護支援、柔軟な就労形態の検討などの事業を推進していきます。学内外のニーズを踏まえ、国や世界の動向をとらえて、着実な業務の実施とセンターの活性化につとめたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

女性研究者支援センター・特任教授 犬塚 典子

キッズサイエンススクール

8月16日から20日の5日間で開催予定です。
詳細が決まりましたら、お知らせします。

女性のための相談室 開室日

6月4日、6月11日、6月17日、6月24日
7月2日、7月9日、7月16日、7月23日、7月30日

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>